

ハンナ・アレントのヒューマニズム論 ——政治と文化における危機

青木崇(一橋大学)

本発表ではハンナ・アレントのヒューマニズム論に注目する。アレントの著作の中で「ヒューマニズム」という概念について最も明示的に論じられているのは、『過去と未来の間』(1963, 1968)に収められた「文化における危機——その社会的-政治的意義」(ドイツ語版の表題は「政治と文化」、以下では「文化危機論」と略記)という論文であるが、その表題が示しているように、この論文およびそのヒューマニズム論がアレントの政治理論や公共性論から独立しているわけでは決してない。アレントはこの論文において、ヒューマニズムとは「文化的精神(cultura animi)、すなわち世界の物を気遣い、保存し賞賛する方法を知っている態度の結果である」と論じ、文化の危機が深刻化する様を具体的な事象に即して描写しながら、文化の危機が政治の危機でもあると主張する。そうだとすれば、なぜ文化の危機が政治の危機にまで繋がるのか。そして、文化的対象物への気遣いとしてのヒューマニズムはいかにして「政治的なるもの」に、あるいは人々の政治的なあり方に寄与するのだろうか。また、「文化危機論」はこれまで、アレントが生前に完成させた作品の中では最もまとまったかたちで遺された政治的判断論の一つとして読まれてきた。確かにアレントはこの論文で政治的判断について論じているし、この論文が政治的判断論としてしか読まれてこなかった背景には『精神の生活』第3巻「判断」がアレントの急死によって書かれぬままとなった、ということがある。しかしやはり、この論文の主題を見逃すべきではないのであり、この論文を文化の危機やヒューマニズムというその主題から再評価することはアレントの公共性論の隠された側面を照らし出すと考えられる。

通常、アレントにおける公共性は、行為としての言論を交わし、互いが誰であるのかを露わにし合う人々の間に開かれるものとして理解されている。しかし、アレントの公共性論にとって「行為と言論」に匹敵するほどに重要なのは、こうした公共性が机や椅子、建物や法律といった「制作物」によって一定の安定性を得るということでもある。「行為と言論」なしに公共性が開かれることはないのだが、公共性が人間の手によって制作されることで一定の安定性と耐久性を付された「物」との関わりの中で成立・維持されるということも忘れてはならない。

ただし、机や椅子や建物が公的空間の維持にとって大きな役割を担うということはイメージしやすいが(なお、本発表でアレントの法論について詳論することはできない)、アレントが「制作物」として論じるものの中には「道具」だけでなく、歴史書や芸術作品——詩、絵画、小説、建築物、記念碑など——といった「物」も含まれる。こうした「物」は、使用の対象物である道具とは違い、鑑賞の対象物として人の一生を越え、場合によっては世紀も時代も越えて永続する。「文化危機論」でアレントはこうした物を「文化的対象物」と表現していると考えられるが、『人間の条件』(1958)を読む限り文化的対象物がいかにして人々の政治的なあり方に資するのかが判然としない。『人間の条件』でも、古代ポリスにおいて政治的行為者たちが自らの死を越えて自らの偉業を後世に伝え遺すための媒体としてこうした「物」が称揚されたということは論じられている。しかしやはり、現に行為と言論を為し政治的に生きている人々にとって文化的対象物を気遣うこと、ひいては文

化的対象物を媒体として過去に拘ることはいかなる意義をもつのか、この点を明らかにするには文化の危機に抵抗するヒューマニズムという観点から「文化危機論」という論文およびその政治的判断論を捉え直すことが不可欠である。

近年、世界的に見てもますます——ヌスバウムの言葉を借りれば「ガンのように」静かに——進行する人文学の危機に応じるかたちで日本でも様々な仕方でヒューマニズム論が活発に見直されている。その際に参照される議論の一つが1945年10月にサルトルが行なった「実存主義はヒューマニズムか」という講演(以下、「ヒューマニズム講演」と略記)とハイデガーのいわゆる『ヒューマニズム書簡』(1947)である。周知の通り、この講演はそれ自体として当時のフランスに大きな衝撃を与えたが、この講演を受けてジャン・ポーフレがハイデガーに手紙を書き、この手紙に対するハイデガーの批判的な返事が『ヒューマニズム書簡』として公開されたことによってより大きな余波を残した。後にレヴィナス、フーコー、デリダらがこの二人の遺り取りに応答したことは広く知られているし、最近では1999年にスローターダイクが『「人間園」の規則』をハイデガーの『ヒューマニズム書簡』への返事として出版した。一方で、アレントも1940年代後半にサルトルのヒューマニズム講演に一定の反応を示していたことはあまり知られていないように思われる。サルトルのヒューマニズム講演から半年も経たない1946年2月に、アレントは「フランス実存主義」という数ページの文章を、さらにその年の11月には実存「主義」という言葉を避けて「実存哲学とは何か」と題した論文を書いている。論調からしてヒューマニズム講演の内容を知っていたわけではないと推測できるが、アレントは「フランス実存主義」で「サルトルは何らかの新しい積極的な哲学に、新しいヒューマニズムに突き進みつつあるように思われる」と述べており、「実存哲学とは何か」でも「ヒューマニズム」という語が何度も登場する。

とりわけ興味深いのが後者である。この論文は、ヤスパースの実存哲学を賛美し、ハイデガーのそれを批判したことでも有名である。また、このことと同時に、ハイデガーのナチ入党から続いていたアレントとハイデガーの絶縁状態が1950年2月に解消された後にアレント自身がここでのハイデガー批判を撤回したこともよく知られている。しかしこの論文は、アレントから見たハイデガーのナチ問題における一局面にすぎないわけではない。この論文は、存在や存在者の中で人間をいかに位置付けるか、という存在論的な問題意識のもと、カントにまで遡って実存哲学やヒューマニズムについての哲学的考察を展開している。

こうした文脈で語られるヒューマニズムは、「文化危機論」におけるそれとは違って「人文主義」としては捉え難く、むしろ「人間主義」として理解すべきものであろう。しかしながら、ハイデガー批判としては撤回されたのだとしても、存在や存在者の中で人間をいかに位置付けるかという、その存在論的-人間主義的な問題意識が「文化危機論」にも引き継がれているとすれば、「文化危機論」におけるヒューマニズムを「人文主義」としてのみ理解することはできないのではないかと。

以上の考察を通して本発表では、「文化的対象物」を気遣いながらも「政治的」という人間のあり方に関わるという意味で単なるディレッタンティズムに陥らないヒューマニズムの可能性について報告する。